
心に煌めく光

瑠璃色の墮天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心に煌めく光

【Nコード】

N4367J

【作者名】

瑠璃色の墮天使

【あらすじ】

第四弾。

今回も栞。

栞は僕の好きなキャラです。

「祐一さん、今日の夜ですがお暇ですか？」

「なんだいきなり、栞？」

「今日も食堂でありがたく栞の手作り弁当を食べながら、俺は聞き返した。」

「ここは昼間普段の日は戦場となるが、さすがに土曜日は

ほとんど生徒も見掛けず、がらがらである。

まあおかげで栞といっても冷やかせたりはしないのだが……

「実は昨日久しぶりにお姉ちゃんと買い物に行っただけですけど……」

「

「いいよね、学生は暇そうで……」

「祐一さんだって学生じゃないですか！」

「まあそれはそうだけど……もう俺は受験生だぜ。
それに比べて栞は暇そうだもんな……」

「昨日はたまたま何もなかったですよ」

「暇人呼ばわりされたのが不満だったらしく、栞は口を尖らせている。」

「どうせウィンドウショッピングだったんだろ？」

「うー？……ま、まあいいのが見つからなかったの……」

「つまりウィンドウショッピングだろ？」

「そんな事言う人は嫌いです！」

「やっぱりウィンドウショッピングだったのか」

「うう……祐一さん、嫌いです……」

栞はそう言って、よよと泣く真似をする。

その栞の仕草が妙に可愛らしくて、俺は口元をほころばせる。

「あ、祐一さん、今笑いましたね？」

「いや仕草が可愛らしくてな……」

「え？えー！？……あ、あの、えーと……」

見る見る顔を赤くして、栞はうつむいた。

「うんうん、栞は可愛いぞ……子供みたいで」

「私、子供じゃないです！」

「身長と胸以外はな」

「ひどいです、祐一さん！」

栞の照れていた顔が一変して、怒りの表情に変わる。

「・・・そんなこという人、嫌いです」

「冗談だつて」

「冗談でも傷つきました」

「じゃあ本気」

「本気じゃあもつと傷つきますよ！」

「おいおい、じゃあ俺はどうしたらいいんだ？」

「もう二度と言わなければいいんです！」

よっぽど気にしてたのか、頬を膨らませて栞は怒っていた。

「うーん、自信ないな・・・」

「自信を持つて下さい、絶対！」

「それで買い物に行つて、それからどうしたんだ？」

「はあはあ・・・きゅ、急に話を戻さないでください・・・」

いきなりの話の展開に驚いたのか、栞はついていけなかったようだ。

ふ、まだまだ未熟だな……

「それで買い物に行って何かあったのか？イグアナの卵を発見したとか……？」

「そんな気持ちの悪いもの見たくないですよ！
そうではなくて、花火のコーナーがあっただですよ」

「花火？」

「はい、普通の花火から大きな花火まで……」

「へえ、結構売り出されるのが早いな……」

シーズンのにスーパーなどで花火が売り出されるのは、

大体初夏から秋の初めくらいまでである。

それなのにまだ春の終わりくらいのこの季節に売り出されるとは……

「はい、私もびっくりしました。最近の花火っていろいろな種類があるんですよ！

こんなに大きな花火だってありました」

栞は手をいっぱいに広げて、その大きさを示した。

いくらなんでもそれはいいすぎと思うが……

「花火か……懐かしいな。最近全然やってないからな……」

「私も昔・・・お姉ちゃんとお母さんとお父さんと四人でやりました。」

家の庭で小さい普通の花火でしたけど・・・楽しかったです・・・

「

少しあの頃の寂しさを含んだ笑顔で、栞は静かに言った。

「俺は友達とよくやったな・・・」

「お友達とですか？」

「ああ、花火でいろいろと悪さをしたもんだ」

「よかったら聞かせて下さいよ、祐一さん！」

栞は好奇心一杯に俺の話を待っている。

「・・・どうしようか・・・」

「そんなに知りたいか、栞？」

「はい、ぜひ聞きたいです！」

「・・・秘密」

「わ、気になります。聞かせて下さいよ」

「そんなにたいした話じゃないって」

「そんな事言われたら余計に気になりますよ。」

どうしても言わないって言うんなら、こっちにも考えがあります」

栞は自信ありげに、含み笑いをする。

何だ……どうするつもりだ、栞……

「ほほう、たいした自信だが……考えとは？」

「今祐一さんが食べている弁当の量、明日から三倍にします」

「俺が悪うございました。素直にすべてをあなた様に話しますので、三倍だけは勘弁して下さい」

「ふふふ、私の勝ちです」

いくらなんでもこの量の三倍も食べたら俺は死ぬ！

俺は観念して、栞は思い出話を聞かせる事にした。

「それでは聞かせてやろう……時に元禄六年の頃……」

「祐一さんはいつの生まれですか！」

「冗談だつて。あれは……確か小学校高学年の頃だったかな……」

近所の駄菓子屋で花火の安売りをしてたんだ」

「安売り……ですか？」

「ああ。花火なんて季節がすぎればまったく売れなくなるだろ。その店もかなり売れ残ったらしくてな……」
「確か、半額くらいで売ってたんだ」

当然その頃は善悪の区別もまともにつかない可愛い俺。

自分のおこずかいをあるだけ持ち出して、

面白そうな花火を手当たり次第に買った。

……それが後の悲劇に繋がるとも知らないで……

「それで、その売っていた花火をどうしたんですか？」

「もちろん親に内緒でみんなでやろうって事になってな、かなりの量を買って、夜に近くの河原でやる事にしたんだ」

「いたずらっ子だったんですね」

「まあな……あの頃は若かった……」

「そんな老けたような言い方、祐一さんには似合いませんよ」

くすくす笑いながら、栞は言った。

本当に最近楽しそうに笑うようになったな、栞……

俺は少し嬉しく思いつつ、話を続けた。

「それで夜、皆で集まった後花火をつけようとしたんだが、

マッチがしけつてたのか火がつかなくてな・・・」

「それじゃあできないんじゃないですか？」

「まあな・・・今思えばあのマッチ、もう腐つてたのかもな・・・」

あの駄菓子屋、かなり年代ものの店だったし・・・

ラムネなんて昭和元年ものもあつたんだぞ。

どんな駄菓子屋だ、一体・・・

「で、焦った俺達は一体どういう方法をとったと思う？」

「うーん・・・分かりません」

「ヒント、タンク」

「タンク？・・・余計に分からなくなりました」

栞は本当に分からないのか、目をパチパチさせている。

「ヒント2、灯油」

「・・・ま、まさか祐一さん・・・」

なんとなく分かったのか、栞は頬に汗を垂らしている。

「お前が今想像している事は多分間違っていない」

「は、はは……わんぱく少年だったんですね」

……わんぱくですましていいのだろうか？

「で、当然燃え上がった炎にびびって慌てて消したんだ。
河原の傍っというのが救いだっただな」

でも親に後でばれて散々しかられたが……

「まあ、こんな所だ。まだほかにもあるけど……聞きたいか？」

「い、いえいえ、もう十分です！」

栞は苦笑いをしながら、首をぶんぶん振る。

ち、もう少しびっくりな話もあったのだが……

「でも……本当に花火って本当に不思議ですよ」

「不思議って……どこがだ？」

栞の言葉の意味がわからず、俺は首をかしげる。

「だって、花火は人をいろんな気持ちにさせてくれるじゃないですか……」

祐一さんの話みたいに楽しい気持ちにさせてくれたり、
あるいは……寂しい気持ちにさせたり……」

「……そうだな……」

栞の言う通りかもしれない……

「でも私、花火の中で……嫌いなものがあります」

「嫌いなもの……？なんだ……？」

「……線香花火です……」

「どうしてだ……？」

何となく気持ちは分かるが、一応聞いてみる事にする。

「だって、あれが一番……切ない気持ちにさせるじゃないですか……」

その時の栞の表情はあの時の栞と同じだった。

黙って何もかもを受け入れようとするあの顔と……

「そうか……？俺は好きだぜ、線香花火」

「……どうしてです？」

「だってあれが一番綺麗じゃないか」

「え！？……でも……」

「……派手なものが綺麗、とはかぎらないだろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

栞は意外な事を聞いたという顔で、俺を見ている。

まあ俺の考えだから、分からなくても仕方はない・・・・・・・・

「・・・・さて、そろそろ帰るか」

何だかんだいって、食堂に来てもうずいぶん時間がすぎている。

俺は食べ終わった栞の弁当をしまい始めると、栞は俺の方に顔を上げて、

「祐一さん・・・・・・・・先ほどの話ですが、夜は・・・・？」

「え？ああ、何にもないぜ・・・・・・・・花火、するのか？」

今までの話から推測した事を俺は聞いてみる。

「はい・・・・・・・・みんなでやりませんか？」

俺は快くオッケーをした。

「よかったです・・・・・・・・たくさん買っちゃいましたから」

大方、珍しさも手伝ってかなり買い込んだのだろう。

栞らしいと言えば栞らしい行動に、俺は苦笑した。

「じゃあ名雪にも聞いてみて、夜にでも行くよ。」

えーと・・・・・・・・八時くらいでいいか？」

「はい！・・・・・・・・祐一さん・・・・・・・・」

「うん？」

「私・・・・・・・・祐一さんと見る花火、楽しみにしてます！」

心から嬉そうな笑顔を、栞は見せてくれた。

俺も・・・・・・・・楽しみにしてるぜ、栞・・・・・・・・

その日の夜、みんなで花火をした。

・ その中で俺が印象的だったのは・・・みんなで見つめた・・・

・・・一つのほのかな花火だった・・・

< 終 >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4367j/>

心に煌めく光

2010年10月28日00時59分発行